



お茶の水女子大学名誉教授

藤原 正彦氏

略歴／ふじわら・まさひこ

1943年旧満州新京生まれ。数学者(専門は数論)。新田次郎・藤原てい夫妻(共に作家)の次男。東京大学理学部数学科卒業、同大学院修士課程修了後、コロラド大学助教授、お茶の水女子大学理学部教授を歴任。78年『若き数学者のアメリカ』(新潮文庫)で日本エッセイスト・クラブ賞、2010年『名著講義』(文春文庫)で文藝春秋読者賞を受賞。その他の著書は『国家の品格』(新潮新書)、『決定版 この国のけじめ』(文春文庫)、『天才の栄光と挫折』(文春文庫)、『日本人の誇り』(文春新書)など多数。2005年に出版された『国家の品格』は270万部の大ベストセラーとなった。

今こそ歴史に学び、 失われつつある 「日本人の誇り」を取り戻すとき

数学者であり、作家として戦前の日本人が育んできた「日本人の誇り」を再認識することの重要性を提言し続けている藤原正彦氏。そのメッセージには日本や日本人に対する深い愛情が込められています。本誌創刊号を飾る会長対談では、宗岡会長兼CEOと、世界に誇る日本人の精神や、グローバル化が進む中で今後の日本のあるべき姿について語り合っていました。

父に煽てられ、数学者が作家の道へ

宗岡 このたびは、知性とユーモアにあふれる独自のスタイルで、日本人のあり方、そして日本の進むべき道を発信し続けている藤原正彦さんをお迎えしました。先生は著作の中で、数学者の道を志したのは小学校5年生のときだったと書かれています。そのきっかけはどのようなものだったのですか。

藤原 父と母の生家がある長野県諏訪の隣村に小平邦彦（※1）という数学の先生がいて、プリンストン大学教授時代に数学者のノーベル賞と言われるフィールズ賞を受賞しました。小平先生とは家族ぐるみのご縁があり身近な存在だったので、「あの先生が取ったなら僕も数学者になろう」と単純に決意したのが小学校5年生のとき。それから後先を考えずに猪突猛進しました。

宗岡 最近ある雑誌で、藤原先生の小学校時代の図画工作の先生で、後に文化功労者となった安野光雅さんがお書きになった「数学者になった、小学校の教え子」というエッセイを読み、藤原少年の神童ぶりを垣間見た気がしました。その中で安野先生がお書きになった使用前・使用後のイラストは興味深い。私の場合はずっと使用前のままですが（笑）。

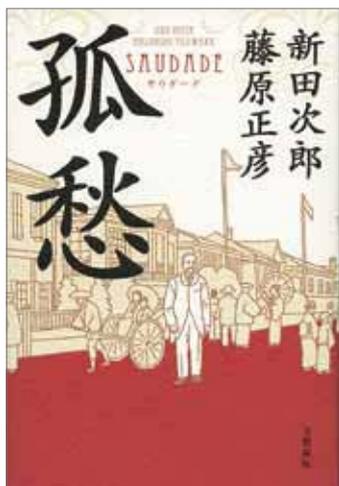
藤原 武蔵野市立第四小学校時代の担任で、若くて大変面白い先生でした。算数と陸軍二等兵時代の話しかしい。特に二等兵時代、いかにいじめられたかを面白おかしく話すのを聞いて、転げまわって笑ったものです。

宗岡 その後、作家への第一歩として、コロラド大学助



【週刊朝日】2012年11月16日号「安野光雅 逢えてよかった」より ©空想工房

「大学進学適性検査の問題に、藤原少年一人だけが非の打ちどころがない答えを出した」とエッセイの中で安野先生は振り返っている。



父・新田次郎の未完の遺作を書き継いだ奇跡の小説。明治・大正期のポルトガル人外交官モラエスが日本の美しい自然を通して感じた祖国への孤愁が繊細に描かれている。藤原氏は遺された9冊の取材ノートを手掛かりにモラエスゆかりの地を訪れ、30年間にわたり資料を集めて物語の続きを書き上げた。（昨年11月文藝春秋より刊行）

新日鉄住金 代表取締役会長兼 CEO

宗岡 正二

※1 小平邦彦 1915～97年。日本人で初めてフィールズ賞を受賞した20世紀を代表する数学者の一人。90年代前半まで算数・数学教科書の監修も務めた。

教授時代の経験をもとに『若き数学者のアメリカ』をお書きになりましたね。

藤原 数学一筋で一生を終えるつもりでしたが、後で父に聞いたら、私がアメリカから毎週送ってくる絵葉書が面白かったらしい。1章書いて父に見せたところ「まだきこえないが、読者を最後まで引つ張る力がある。変なところが親に似るもんだなあ」と煽てられ書き始めました。

歴史や文学に見る日本人の精神

宗岡 お茶の水女子大学で、明治時代の日本文学の読書ゼミを担当されたときの様子を著作『名著講義』で拝読しました。受講する学生の反応が素晴らしく、きちんと学んでいると感じましたが、指導で心がけていらっしやることはありますか。

藤原 読むべき本の選定は学生の意見は聞かずに私が決めます。指導する立場である教師は一方的にやらないとダメ。学生は新渡戸稲造^{※2}の著作『武士道』など古いものに最初は戸惑いますが、あつという間に受け入れていく。『きけわだつみのこえ』^{※3}の特攻隊で死んだ学徒の手記では、その深い情緒、教養の高さに劣等感さえ感じるようになる。まるで洗脳教育のようだと言われてしまいますが(笑)、大學生になつてからでも、ちゃんとした指導者がちゃんとした教材で教えれば学生の物の見方はガラリと変わります。

宗岡 私は学生時代、柔道部にいたこともあり『武士道』は何度も読みましたが、新渡戸さんは札幌農学校(現北海道大学)にあるすべての洋書を読み、欧米人が読んでも感心する格調高い英語で文章を書くなど、博覧強記というか物凄い教養の深さを感じました。しかもその英語の筆跡が素晴らしくきれいなんですね。

藤原 新渡戸稲造はヨーロッパなどの文献を引用しながら英語で書いていますが、日本の立場を世界に主張する

愛国心からそれをやっています。その勉強量には本当に驚きます。

日本の学者は明治以降の日本は帝国主義、植民地主義、侵略主義、そして江戸時代は士農工商の封建主義だという否定的な歴史観を持ちがちです。しかし幕末から明治初期にかけて来日した欧米人は、日本の武士が教養のある支配階級にもかかわらず最も貧乏なことに驚き、また日本人はみんな貧しくても礼節があり幸せそうだと、素晴らしいと讃め称えています。例えば、西暦500(1500年の千年間、ヨーロッパで著名な文学作品は数少ないのですが、日本には『万葉集』『古今和歌集』『源氏物語』『枕草子』など香り高い文学作品がいくつもあります。

宗岡 小中高校の歴史の授業で習うのはせいぜい明治時代までで、大学受験でも現代史は出てこない。先生は日本の歴史は100年間の流れの中で見ないと間違えると言われていますが、今の学校での歴史教育はすべて輪切りです。

藤原 例えば、学校教育では大戦に至った経緯を、昭和6年の満州事変から終戦までの15年間で切り取ります。が、幕末の1853年にペリーが来航し、1952年にサンフランシスコ講和条約が発効するまでの100年間で1単位で見ないと歴史はわからないと学生には言っています。歴史学者は日本が明治以降富国強兵に走つたと言います。しかしアジアやアフリカの国々が次々と植民地化されている中で、自国の尊厳と独立を守るためには、身分不相応の気高い決意をせざるを得なかったのです。

世界に誇るべき日本文明と、育まれた惻隠の情

宗岡 1990年代にベストセラーとなった『文明の衝突』では、著者であるハーバード大学のサミュエル・ハ



お茶の水女子大学での授業風景 文藝春秋提供

※2 新渡戸稲造 1862(1863)年。農学者・教育者・倫理哲学者。国際連盟事務次長も務め、著書『武士道(Bushido: The Soul of Japan)』は長年世界中で読み続けられている。東京女子大学初代学長。

※3 『きけわだつみのこえ』第二次世界大戦末期に戦没した日本の学徒兵の遺書を集めた遺稿集。

ンチントン教授が、日本を西欧文明やイスラム文明、中華文明などと並ぶ、世界7大文明(※4)の一つに位置付けています。他文明は複数の国から構成されますが、日本がこんな小さな島国1国で世界史に残る高度な文明を築いたことは誇れることだと思います。

藤原 日本はこの小さな島国でそうした文明を築き上げた本場に「異常な国」です。今「普通の国になれ」という政治家もいますが、昔も今もこれからも常に異常な国でなければなりません。例えば他国が帝国主義に走っても、武士道精神(※5)や日本が昔から持つ「惻隱の情(敗者・弱者への思いやり)」に反することをやってはいけません。

宗岡 ささまざまな国の鉄鋼メーカーのトップと会って議論すると、海外メーカーは自己を強く主張する。最初は相手の考えが理解できませんでしたが、先生のおっしゃるとおり、最近ではむしろ日本人の考え方が特異なのではないかと思うようになった。日本人だけは自分の権利を激しく主張することは「さもししい」「はしたない」という意識がある。ただ国際ビジネスの場では、日本企業もきちんと自己主張していかなければなりません。

また約2年前、当社柔道部の試合で松山に行ったとき、司馬遼太郎の『坂の上の雲』に登場する秋山好古・真之(※6)の生家(復元)を訪れました。兄の好古は陸軍大将となり、教育総監などを歴任しましたが、その後元帥の就任要請を断り、郷里の人々のためにできたばかりの中学校の初代校長になりその職に生涯を捧げた。こうした志の高さや清々しさも日本人の資質だと感じます。

日本人の誇りを取り戻すために

宗岡 先生は真のエリートの条件として、1つは文学や芸術、思想、歴史、科学などの圧倒的な教養とそれを基

盤とした大局観を持つこと、2つ目はいざとなれば国民や国に命を捧げる気概だと言われ、現在は政治家、官僚、財界を含め、日本にこうした資質を持つ真のエリートがいなくなったと指摘されていますね。

藤原 20年ほど前は旧制高等学校出身者を中心にそうした優れた人材がいましたが、その人たちが引退した後、大局観を持つリーダーがいなくなった。政治家は選挙に勝つこと、官僚は省庁の利益、学者は研究費の獲得、財界も短期的な収益が目がいつています。

これは、かつて連合国軍総司令部(GHQ)や日本教職員組合(日教組)の主導で、旧制中学・高校というエリート養成機関が廃止された戦後教育に一因があると思います。アメリカが日本の伝統や文化を否定し、再び立ち上がるのではないように潰したこうした制度や仕組みの再建が必要です。

もう一つは読書文化の衰退です。私の学生時代は、『ラマーゾフの兄弟』など友達が読んだ名著を読んでいたと恥ずかしい思いをした。この衰退が教養不足につながって大局観を持ってない現状になってしまったと感じています。

宗岡 先生は著作の中で、日本人が日本人らしさを再び取り戻すために、GHQ主導による東京裁判や、自衛権を失った押し付けの新憲法、公よりも個を尊重する教育基本法の見直しを主張されています。

藤原 まず他国に守ってもらおうのは属国であり、それでは胸を張って歩けません。また戦前の日本の精神や文化、歴史を否定したGHQから日教組に継承された教育政策、歴史教育のあり方を見直し、新たな教科書を作らなければなりません。先ほど話した幕末から明治時代にかけての優れた人物などを通して、惻隱の情や、敗者への同情、卑怯を憎む勇氣、金より徳、個人より公といった、日本人が本来持つ資質を再認識し、「日本は異常な国で世

※4 世界7大文明 中華文明、インドウー文明、イスラム文明、日本文明、東方正教文明(ロシアなど)、西欧文明、ラテンアメリカ文明。

※5 武士道精神 日本の近世以降の封建社会における武士階級の倫理・価値基準の根本を成す思想一般を指す。君に忠、親に孝、自らを厳しく節し、下位者には慈悲を以て接し、敵には憐れみを、私欲を忌み、公正を尊び、富貴よりも名誉を以て貴しとなすという考えが底流に流れている。



秋山好古が校長を務めた北予中学校(現愛媛県立松山北高校) 松山市立子規記念博物館所蔵

※6 秋山好古・真之 兄・好古は世界最弱と言われていた日本陸軍騎兵隊を、ロシアの「コサック騎兵隊」と互角に戦えるまで鍛え上げた日本騎兵隊の父。弟・真之はロシア・バルチック艦隊を撃破した日本海海戦の首席参謀。共に日露戦争を勝利に導いた立役者。

界よりはるかに進んだ国だ」という誇りを持つことができれば、教科書の内容もおのずと変化していくはずです。

宗岡 時間はかかるが諦めてはいけませんね。

大局観を持って、円高、エネルギー問題を乗り越える

宗岡 そうした歴史的背景を踏まえて現在の日本を見ると、政治も経済も課題山積の状況です。特に日本経済の現状をどのように捉えていらっしゃいますか。

藤原 さまざまな課題がある中で、TPPなどに目が向きがちですが、日本が苦しんでいる最大の要因はデフレと円高です。リーマンショック以来、例えばアメリカや韓国、欧州のマネーサプライは2〜3倍になっていますが、日本ではこれほどの増加はなく、為替は足下調整が入っているものの依然3〜4割も円高になっています。これでは輸出産業はたまったものではない。経営の良し悪しの問題ではありません。日銀も貨幣の供給量を飛躍的に増やし、政府は大規模な財政出動をすべきです。

宗岡 ものづくりの国である日本では円高の影響が大変大きいですね。日本企業の利益は良くても売上高の5〜10%程度ですが、これだけ為替変動するとあつという間にマイナスになる。

藤原 2〜3年前アメリカで、トヨタがリコール問題でさんざやられたとき、日本政府は何の手助けもしなかった。商人の世界に国が口を出すのを憚ったのでしようが、こうした問題解決を一企業に任せるのではなく、国が側面援護していく姿勢が大切です。この問題の根底には日本とアメリカの特殊な関係も影響しています。アメリカは軍事上では無二の親友、同盟関係ですが、経済上は競合関係にあります。アメリカからの申し入れはすべて自国の利益のためなので、日本も自国の利益をきっちり主張すべきです。この使い分けが必要だと思いますね。

張すべきです。この使い分けが必要だと思いますね。

宗岡 一方、日本にとってエネルギー問題も大きな課題です。原発を停止したままであれば、化石燃料の輸入増により世界的に見て高いエネルギーコストがさらに上昇し、3〜4兆円の負担増になる。供給も不安定です。今後の日本のエネルギー安全保障の課題についてどのように考えていらっしゃいますか。

藤原 石油などのエネルギー資源を持たない国で直ちに原発をやめるという発想は、私にとって1+1=3と言われていたようなものです。原発が恐いことは世界中の誰もが知っている。湯川秀樹さんも最終的な廃棄処理方法を確立するまでは欠陥のある技術だと言っています。その意味では大量のCO₂を排出する石炭や石油にも欠陥があり、要はその欠陥とうまく付き合いつながりかにより良いものに変えていくか。その鍵となるのが技術であり文明です。代替エネルギーの基礎研究・開発を徹底的に推進しながら、目処がつかうまで原発を堅持するしかありません。震えながらも使うのが大人の知恵であり、危ないからすべてを捨てては進歩がないと思います。

国民の目線に立つ政治では国が減じます。国民は国をリードするだけの能力がないことを明言したほうがよい。例えば、日中戦争は天皇と政府、陸海軍のすべてが反対だったにもかかわらず、新聞に煽動された世論に後押しされて始まった歴史的事実があります。人間の能力が異なることを前提に、政治家や官僚、企業も真のエリートを育成し、100年先を見据えた大局観で日本をリードしてもらいたいですね。

社会に貢献する新日鉄住金への期待

宗岡 最後に、厳しい社会・経済環境に置かれた現代の企業経営のあり方についてご意見を伺いたいと思います



海外での現地生産を拡大する日系自動車メーカー

写真提供：共同通信社

す。日本の製造業は長期的視点からじっくり基礎研究に取り組み技術力を高めてきた歴史があり、そこが強みです。その点についてのようにお考えですか。

藤原 過去株主中心主義が喧伝された時期もありましたが、製造業には適していません。製造業は10年後に花開くような研究に投資しなければならぬ一方で、株主は3ヵ月、半年後の株価上昇を期待しています。会社は株主のものという考え方は日本の製造業を弱体化させる一要因であり私は反対です。日本はものづくりが主であることを忘れてはいけません。

宗岡 ものづくりの会社は株主も大事ですが、お客様も大切です。また全国各地の方々、この企業が地元で立地してよかつたと思われる会社になることも重要です。さらに実際に会社を盛り立てている従業員が勤めてよかつたと思える企業でなければなりません。そうした観点から、短期収益だけで経営をやる会社はおかしくなると株主の皆様には申し上げます。

藤原 御社は製鉄所が所在する地域に街までつくっており、東日本大震災で打撃を受けた釜石などでも地域の復興支援を惜しまない。そうした行動を見ると本当に頭が下がります。社会や国民のためという発想は日本企業の特徴で、ものづくりにおいても社会貢献となる製品をつくろうという意志が感じられます。そうした取り組みも税制などの側面から国が支援すべきです。

宗岡 非常にありがたいお言葉です。現在、当社は厳しいグローバル競争の中で世界的に事業を展開していますが、当社へのメッセージをお聞かせください。

藤原 帝国主義は三世紀間、共産主義は74年間、世界を跋扈した末、多大な犠牲とともに終わりました。今また、リーマンショック・ユーロ危機と、20年余り続いた新自由主義・金融資本主義が終焉しつつあります。人間を幸せにしないものだからです。これからはいよいよ、長期

的な研究や開発に地道に取り組む製造業の時代です。中でも重厚長大産業はいつの世になっても国力の要です。新日鉄住金には、今後も工業日本の旗艦として日の丸を背負って頑張っていたいだきたいですね。

宗岡 今日のお話を伺って日本の将来にも希望が持てると感じました。当社も日本の産業界を牽引していく気概を持ち続けていきます。先生には引き続き、著作はもとより、さまざまな場でのご提言を通して、日本人に自信と勇気を与えていただきたいと思います。本日は貴重なお話をいただきありがとうございました。

(本対談は2012年11月12日、新日鉄住金南平台公邸で開催されました)



東日本大震災から完全復旧した釜石製鉄所。地域の復興に積極的に貢献している。